

ジグムント・フロイト『文化への不満』[1930=2007] Das Unbehagen in der Kultur (『幻想の未来／文化への不満』中山元訳、光文社古典新訳文庫、所収)

■ **快感原則**

・乳児の段階で、絶対的な支配権をもつ「快感原則」：「自我のうちにあって不快の原因となりうるすべてのものを分離して、自我の外に放りだし、純粋な快感自我を形成しようとする傾向」。

・しかし「快感を与えてくれるための手放したくない多くの感情の源泉が、自我の内部ではなく客体のものであること、反対に放りだしたい不快な感情の源泉が、自我の内部から生まれたものであり、自我から分離できないものであることが明らかになる」(131)

・「正確に表現すれば、自我は最初はすべてのものを包み込んでいるが、のちに外界をみずからの外部に排除するのである。大人の自我感情は、初期のはるかに広大な感情、すべてのものを包み込む感情がしばんだ名残にすぎないのであり、初期の頃には自我は環境世界ともっと親密に結びついていたのである。」(132-133)

・**快感原則と「幸福」**：「もっとも厳密な意味での幸福は、強くせきとめられていた欲求が急速に満足させられるときに生まれるものであり、ほんらい挿話的な現象としてしか現れないのである。快感原則が望んでいた状況も長続きすると、気の抜けた快適さをもたらすにすぎないのである。わたくしたちは、激しい対照（コントラスト）だけに快感を覚えるのであり、快を覚える状況はわずかしか享受できないものである。

このように人間が幸福になる可能性というものは、私たちの心的な構成のために制約を受けているのだ」(149-150)

・**快感原則から現実原則へ**：「人間がこのようなありうべき苦難の圧力のもとで、幸福への要求を緩和せざるをえなかったのは不思議ではない。そして外界からの影響によって、快感原則を控えめな現実原則に作り換えたのだった。だから不幸をまぬがれたことや、苦難を克服できたことだけで、自分は幸福であると感じるようになったのだし、やがて一般的に苦痛を避けるという課題が優先されて、快感の獲得は背景に追いやられるようになったのである。」(151)

・**人間の苦悩が発生する三つの源泉**：①自然の圧倒的な威力、②人間の身体のもろさ、③家族、国家、社会における他者との関係を規制するさまざまな制度の不十分さ(170)

・「すべての欲求を無制限に満足させるという立場は、もっとも魅惑的な生き方として注目を集めるが、あまりに享受を重視すると、すぐに破綻するという罰をうける」(151)

■ **苦痛を回避する方法**

(1) 「他人との関係のために生まれる苦痛から身を守るもっとも簡略な方法は、みずから望んで孤独を守って、他人から遠ざかることである。この方法で実現できる幸福が、平安であるのは明らかである。」(151-152)

(2) 「もっとも興味深い方法は、自分の身体の器官に働きかけることである。」(152)その「もっとも素朴で、しかも効果的なのは、薬物による中毒である。」(152-153)

(3) 「欲動の満足は幸福をもたらすが、外界の状況のために飢えたり、欲求の充足が妨げられたりすると、強い苦痛が生まれることになる。」(154)「この苦痛からの防衛方法」は、「欲求が生まれる内的な源泉を支配しようとする」ことである。

(3-a) 欲望の滅却（放棄）：例えばヨガの修行(155)。

(3-b) 欲動の制御（飼い慣らし）：欲求充足を放棄しないで、これを制御する。現実原則に従う高次の心的な審級。しかし「自我が制御できないような荒々しい欲動の動きを満たした場合の幸福感は、飼い慣らされた欲動の動きを満たした場合とは、比較にならないほどに強いものである(155-156)。

(4) 欲動の目標をずらす方法：

(4-a) 「欲動の昇華」：「心に働きかける仕事や知的な仕事から生まれる快感の量を高めることができれば、この目標を実現できる場合が多い。」「芸術家が創作によって、自分の空想の所産を具体的な作品として表現することによってえられる喜びや、研究者が問題を解決し、真理を認識したことによってえられる喜びなど、この種の満足は特別な性格のものである。」(156)

(4-b) 「幻想による欲動の満足」：「この方法の頂点にあるのが、芸術作品の享受である。」(159)「しかしもっと良い方法がある。この世界を改造してしまえばいいのだ。あるいはこの世界の代わりにもっと別の世界を構築するのだ。この理想的な世界から、現実の世界のさまざまな耐えがたい特徴を根絶して、自分の願望にふさわしい特徴を備えるようにするのである。」(160)

(4-c) 「対象との感情的な結びつき」による充足：愛することと愛されることによって、すべての満足を得ようとする方法(162)。

(4-d) 「美の享受」：「人間の美しい肉体と動作、美しい自然や風景、美しい芸術作品だけでなく、学問的な業績にすら美しいものがある。人生の目的として、美を重視するという姿勢をとることは、わたしたちを脅かす苦悩からの保護にはほとんど役に立たないものの、多くの不幸を償（つぐな）う力がある。美を享受すると、どこかしら特別で穏やかな麻酔をかけられたような感覚を経験するのである。」(163-164)

■ 幸福になるための処方

・いずれの方法でも、「望むものすべてを手に入れることはできない。わたしたちは可能な範囲で幸福を獲得するという妥協的な態度をとらざるをえないのであり、これはそれぞれの個人のリビドーの配分において解決すべき問題である。ここにはすべてのひとにあてはまる好ましい方法というものはないのであり、わたしたちは誰もが、自分なりの特別な方法で幸福になるように試みなければならないのである。」(165)

・「他者との性愛（エロス）を重くみる人は、他人にたいする感情的な関係を優先するだろう。自分だけで満足する傾向のあるナルシズム的な人は、基本的に自分の内面的な心的プロセスにおいて満足を求めようとするだろう。そして行動的な人は、自分の力を試すことのできる場である外界を手放すことはないだろう。」(166)

・「もって生まれた欲動の構成が、とくに充足しにくい性質のものだったり、成長してからも、リビドーの構成要素に必要な改造と再配置をうまく実行できなかつたりすると、自分の置かれた環境において幸福を手に入れるのは困難になるだろう。…こうした人には、少なくとも代償的な満足を手にするための最後の手段として、神経症に逃避する道が残されている。」(167)

・ 欲動を満足させるという「リビドーの配分（エコノミー）の課題」(192)

■ 文化への不満

・ある「主張によると、人間が悲惨になる原因の多くは、いわゆる文化にあるというのである。文化を投げ捨てて、原始的な状態に復帰すれば、はるかに幸福になれるだろうというわけだ。」(171)「社会がその文化的な理想を達成するためには、社会の成員に欲望を断念するように強制するのであり、人々が神経症にかかるのは、この断念に耐えきれなくなったから」だといわれる(173)。

・【文化】の定義：「人間の生活と、人間となる以前の動物的な祖先の生活の違いを作りだしたものであること、これは自然の脅威から人間を保護し、人間の相互的な関係を規制するという二つの目的に役立つすべての機能と制度の総称である」(178)「〈文化的〉と呼ばれるものは、人間が大地を自分に役立てたり、自然の暴力から人間を保護したりするために役立つすべての行為と価値である。」(178-179)

・「文化の特徴としてあげられるのがもっともふさわしいのは、高度な精神的な活動である。知的な、科学的な、そして芸術的な業績がどのように評価され、尊重されるかが大切なのである。」(186-187)

・文化に対立する野生としての自由：「文化が発達すると、個人の自由は制約されるようになる。」「ところが文化に飼い慣らされていない原初的な人格の残滓からも、自由への憧れが生まれることがあり、これが文化敵視の土台となることがある。だから自由への憧れは、ある形式の文化および文化要求と対立することも、文化そのものと対立することもある。教育によって人間の本性を、アリの本性と同じようなものに変えることができるとは思えない。人間はつねに、集団の意志に反してでも、個人としての自由を求める要求を防衛しつづけるだろう。」(189-190)

・「欲動の昇華は、文化の発展のプロセスのとくに明確な特徴であり、これによって高度な精神的な活動、すなわち科学的、芸術的、イデオロギー的な活動が、文化生活においてきわめて重要な役割をはたすことができるのである。」(193)

・「文化が欲動の放棄に非常に強く依存していること、あくまでも欲動を満足させないこと、欲動を抑圧し、押しつけ、その他の方法で抑えることを前提としていることがあげられる。この『文化のための欲動の放棄』は、人間の社会的な関係の大きな領域を支配しているのである。周知のように、これがすべての文化的なものに抗する敵意の原因となっている。」(194)

・ただし「原始家族において欲動の自由を満足させることができたのは、家長だけだったことも忘れるべきではない。」(230)「文明化された人間は、幸福になる可能性の一部を捨てて、共同生活における安全性を手にしたのである。」(230)

・フロイトの理想とする【文化】：「文化とは最初はばらばらの個人を、次に家族を、さらに部族、民族、国家などを、より大きな統一である人類にまとめようとするエロスに奉仕するプロセスなのである。」「これらの人間集団は、リビドーの力でたがいに結びつけられる必要がある。」(243)「文化とは、人類という種において演じられたエロスと死の闘い、生の欲動と破壊欲動の闘いなのである。」(243)

■ 愛と文化の関係

・性愛の動揺と幻滅を克服した「愛」：「ごく少数の人は、ある生まれつきの素質によって、愛の力で幸福をみいだすことができる。そのためには、心のうちで愛の機能を大きく変え

てしまう必要がある。すなわち愛されることではなく、愛することに重点をずらすのである。そうすれば愛する相手から愛される必要はなくなる。自分の愛を個別の対象ではなく、すべての人間に同じように向けることで、愛する対象を喪失しても打撃を受けないですむようにするのである。要するにこの道は、自分の愛を性的な対象に向けず、目標を制止された欲動の動きに変えることで、性器的な愛の動揺と幻滅を経験しなくてもすむようにするのである。」(201-202)→「アッシジの聖フランチェスコは、内面的な幸福感のために愛を利用するというこの道の達人だったろう。」(202)

・しかし「相手を選ばない愛というものは、愛する対象にある不正をなすものであり、愛の本質の一部を失っているのである。そしてもう一つは、すべての人が愛に値するわけではないということである。」(203)

・**性愛に導かれた文化活動**：「男性が文化的な目的で利用するリビドーは、もともとはその大部分が女性と性生活に向けられていたものなのである。」(206)

・ところが「文化は性的な活動から大量の心的エネルギーをとりさって、文化活動において消費させねばならない」(207)。→西洋の文化は、性的に抑圧された者たちが叛乱するのを恐れて、まず幼児性愛を抑圧し、「性器を使わない欲望の充足のほとんどを、倒錯として禁止してしまった」。(208)。さらに、西洋の文化は、「一夫一婦制という公的な正当性を認められた関係のうちに」性愛を限定した。

・**性愛と共同体**：「愛情関係が強まると、愛する人々は外の世界にまったく関心を示さなくなる。」(215)「文明化された共同体」の理想は、愛し合う「それぞれカップルがリビドーを満足させながら、労働と利害の共同性に基づく連合体を形成しているという状態」であろう(215-216)。「しかしこうした理想的な状態は存在していない。」「現実には文化は、これまで実現されたような人的な結びつきのあり方には満足しておらず、リビドーを使っても共同体の成員のあいだに強い一体感が生まれるように、あらゆる方法を活用し、共同体の絆を友情関係で強化するために、〈目標を制止された〉リビドーを大量に動員しているのである。」(216)

■ 攻撃衝動

・「人間とは、攻撃された場合だけに自衛するような柔和で、愛を求める存在ではないし、人間に与えられた欲動には、多量の攻撃衝動が含まれる。…[人間は自分に]攻撃衝動を向け、労働力を代償なしに搾取し、[他者を]同意なしに性的に利用し、その持ち分を奪い、辱(はずかし)め、苦痛を与え、拷問し、殺害するよう誘惑する存在なのである。人間は人間にとって狼なのである。」(222)

・共産主義者たちは、私有財産を廃止して、すべての富を共有して享受すれば、人々の間の悪意と敵対関係がなくなるだろうと考えた。(225)

・**攻撃欲の無害化としての「超自我」形成**：「個人は、自分の攻撃欲を無害なものとするために、どのような方法を採用しているだろうか。…この攻撃欲を内側に向け、内面化し、それが発生した場所、すなわち自分の自我に向けるのである。／このようにして自我に向けられた攻撃欲は、超自我として自我のほかの部分と対立している部分に取り込まれ、これが『良心』となるのである。この良心は、ほんらいなら他の見知らぬ個人に発揮したかったはずの強い攻撃性を自我に対して行使するのである。こうして、厳格な超自我と、超自我に支配された自我のあいだに緊張関係が発生する。」(245-246)

・「不運のため、すなわち外部の原因のために欲動の充足が拒まれると、超自我における良心の力が強くなるのである。すべてが順調に進んでいる場合には、良心の声も穏やかなものであり、自我に何でも許そうとする。しかし不幸が人間を襲うと、人は自らを反省して、自分の罪深さを認めるようになる。こうして良心の要求は強くなり、禁欲を課して、贖罪で自分を罰するようになるのである。」(251)

■ 欲動の断念

・【第一段階】:「まず外部の権威者から攻撃されるのではないかという不安のために、欲動の充足が断念される。これは他者の愛の喪失への不安でもある。」(255-256)

・【第二段階】:「次に自我の内部に権威が構築され、この権威に対する不安のために欲動の充足が断念され、良心の不安が生まれる。」→悪しき行為のみならず、悪しき意図をもっただけで、自分は罪深いという「罪の意識」が生まれる。すると自分で自分を処罰したいという攻撃的な欲求が生まれる。この自己処罰という攻撃的欲求は、自分で自分の欲動を断念するように求める。「新たに欲動の充足を断念すごとに、良心はますます厳格で不寛容になっていく」(257)。

■ 超自我と不安

・「超自我」の形成によって文化が発展する。→「良心(の呵責)」と「罪の意識」が生まれる。→不安に直面する。→自己懲罰への欲求が生まれる。→欲動充足が断念される。→幸福が失われる。

・「超自我は、精神分析において発見された審級であり、良心はこの超自我の一つの機能と考えることができる。良心はとくに、自我の行動と意図を監視し、判断するという検閲のような活動を担うものである。罪悪感とは、超自我の厳格さのあらわれで、良心の厳格さと同じものである。」(272)

・「不安は、これらすべての関係の根底にあって、以上のような批判的な審級に直面するものであり、みずからに罰を与えようとする自己処罰の欲求であり、サディスティックなまでに超自我の影響を受けて、マゾヒスティックになった自我の欲動の発現である。」(272-273)

・「宗教はつねに人間を(罪)と呼ばれるこの罪悪感から解放することを唱えて登場する」(270)

■ 文化(超自我)による個人(エス)の抑圧

・「個人の発達プロセスは、自分の幸福を実現しようとする営み(通常は「利己的な」努力と呼ばれる)と、他人と結びついて共同体を作り出そうとする営み(「利他的な」努力と呼ばれる)という二つの努力が、相互に干渉することによって生まれる」(281)。

・「ところが文化的なプロセスでは事情が異なる。このプロセスでは、多数の個人から一つのまとまった共同体を作り出すという目的が主要な役割をはたしている。幸福の実現という目的は存在しないわけではないが、背景に押しやられているのである。大きな共同体を形成するためには、個人の幸福などに配慮しないのが最善の方法ではないかと思われるほどなのである。」(281)

・「ある文化的な時代の[時代を画するような(エポック)]超自我は、個人の超自我と同じ

ような源泉から誕生したものであり、偉大な指導者が残した印象から生まれるのである。この偉大な指導者とは、きわめて傑出した精神的な力をそなえている人物であるか、あるいは人間が抱いているさまざまな努力目標のうちの一つを、もっとも純粋な強い形で（そのためにしばしば一面的に）体現しているような人物である。」(283)

・「文化の超自我も厳しい理想要求を定めていて、この要求を満たさないと、「良心の不安」に苦しめられる」(284)

・「超自我は、みずからの命令と禁止にこだわるあまり、自我の幸福にほとんど配慮しない。またみずからの命令にしたがうことに抵抗する力として、エスの欲動の強さと外界の世界のさまざまな困難があることに、十分に配慮していない。」(286)

・「いわゆる自然な倫理が与えてくれるのは、他人よりも自分が優れていると考えるナルシズム的な満足だけである。宗教に依拠した倫理は、来世での善き生を約束することで、この問題に対処しようとする。」(287-288)